

地域レポート**八重山リポート**

沖縄県立八重山病院 小児科
宍田 紀夫

はじめに

私が初めて石垣島の地に降り立ったのは、大学を卒業して2年目の平成4年2月末でした。その時は、当時所属していた大阪市立大学小児科からの派遣で、3か月間お世話になりました。その後縁あって平成13年から現在まで県立八重山病院に勤務しています。

ここからは石垣島の子どもたちの様子、八重山の乳幼児健診、県立八重山病院小児科について報告をさせていただきます。

八重山諸島は、石垣市（約48,000人）、竹富町（約4,100人）、与那国町（約1,700人）からなり、周辺には12の有人離島があります。子どもの数も多く、活気あふれる地域です。最近はテレビで紹介されることも多く、内地でも広く知られるようになったと思いますが、まだ沖縄本島に近い島と思っている方も多く、大阪の友人が沖縄本島に来る時などは、「石垣島にも行く。」と言ってくれますが、飛行機に乗らないといけない距離とは思っていないようです。（石垣島は那覇市から約400キロ離れています。）

石垣島の子どもたちの様子について

都会から移住してきた当初、私には新鮮なことがたくさんありました。第一に感じたことは、元気な子どもが多いということです。内地に比べて外遊びをする子が多いと感じます。子どもたちは学校などで会った時、元気な声で挨拶をしてくれます。さらに、子どもたちが人前に出ることに慣れていることも驚きました。初めて出席した石垣島の結婚披露宴で、子どもたちが舞台上がり、人前で緊張もせず踊っている姿がとても印象的でした。お座りが

やっとできるようになった子も泣かずに舞台上がっていたので、小さいころから人前で踊ったりすることに慣れているのでしょう。この時、石垣では子どもたちにおひねりが飛ぶのにも驚きました。

次に感じたことは、子どもの祝い事が多く、節々に親戚や親の友人など、地域の人が集まってお祝いをすることです。満産祝いや誕生祝いは内地でもしますが、親戚や友人が集まることはまずありません。石垣島では親戚の繋がりがとても強く、また親の友人関係も子どものころから長く続き、その繋がりも強いように感じます。

これらをひっくるめて感じたことは、子どもたちが地域に見守られて育っている、ということです。運動会や学芸会などの行事にも親戚をはじめ、地域の人が多く参加します。さらに、石垣の子どもたちの活躍には目覚ましいものがあります。毎年全国規模の大会に色々な分野で出場し、野球、陸上、空手、ソフトテニス、マーチング等、大変活躍しています。もちろん勉強を頑張っている子も多いです。そのようなことから、島の子もたちが多くの方に見守られ、育てられていることを実感しています。

乳幼児健診について

石垣市では大体月6回、離島健診は竹富町（竹富島、黒島、西表島、小浜島、波照間島）、与那国町では年3回実施されています。石垣島の健診は1回35人前後で乳児前後期、1歳6か月児健診、3歳健診がそれぞれ別々に実施され、その健診は保健師、母子推進員、歯科衛生士、栄養士、小児科医師、歯科医師、検査技師等、多いときは20人位のチームで行い、病院では把握できない育児状況や予防接種漏

れも見つけることが出来ています。健診スタッフは大体顔見知りなので情報共有がスムーズに行われています。時々ですが、食事会を開催してスタッフ間の交流も深めています。

竹富町の健診は4か月毎に1回実施され、1週間で各離島を回ります。その1週間は毎日石垣島から船で各離島を往復します。高速船で15分から70分、酷い揺れの中での移動は大変です。冬場は波が荒く、欠航することもあります。

与那国町の健診も4か月毎に1回実施され、前日宿泊で飛行機での移動になります。与那国島から120kmの距離に石垣島があり、また与那国島から台湾まで約110kmの距離なので、ちょうど台湾と石垣島の間くらいに与那国島は位置しています。条件が整えば与那国島から台湾の山が稀に見えるそうですが、残念ながら私はまだそれを見たことがありません。

離島健診は、私にとって離島からの受診の大変さを感じる事の出来る貴重な経験となっています。離島では乳児から3歳児まで一度に健診を行います。その時に2歳児歯科健診も一緒に行うことも多くあります。幅広い年齢が来るので、健診会場はとてにぎやかです。たまに受診児がとても少なく、健診スタッフの方が多き時もあります。いずれの島も顔見知りの人が多いので、健診は和気あいあいと和やかに進みます。移動は少し大変ですが、顔見知りのスタッフと一緒に楽しく健診をさせてもらっています。離島での乳幼児健診で問題のある子がいれば県立八重山病院を紹介することになります。その際、離島からの受診は大変なので、子どもの状態に応じて、診療所の先生に診てもらったり、健診ごとにフォローしたりしています。

県立八重山病院小児科について

八重山病院は、八重山諸島唯一の総合病院であり、あらゆる疾患に対応しています。

当院の小児科は、現在5人の常勤医と本島からの週1回の当直応援で、何とか24時間体制を維持しています。小児科では出生体重1,000g未満の超低出生体重児から中学生（一部高校生）に至るまで、幅

広い年齢の様々な疾患に対応しています。また地域の保健師と定期的にカンファレンスを行い、情報の共有を行うことも出来ています。専門性のより高い疾患などで困った時には、沖縄本島の先生方に相談させて頂き治療にあたっています。本島の小児科の先生方からは、離島で困った時にいつでも対応していただけるので、安心して離島医療を行う事が出来ています。時には本島への緊急転院が必要となる事がありますが、旅客機が使えない場合には自衛隊機による搬送も行っています。竹富町、与那国町からの重症例は海上保安庁のヘリコプターによる搬送を行うこともあります。観光客増加が一因かもしれませんが、最近は離島からの溺水例のヘリ搬送が増えています。

また当院は、八重山諸島で唯一のお産を扱っている施設でもあります。年間600例前後のお産があり、そのうち20%が帝王切開で出産しています。また出産後の多くは治療の必要のない赤ちゃんですが、年間70例前後はNICU（新生児集中治療室）で治療を行っています。点滴や酸素投与で改善する例が多いですが、人工換気を必要とする重症例にも対応しています。

さらに、当院は予防接種にも力を入れています。任意ワクチンであるロタウイルス、おたふくかぜに関しても保護者に説明して、接種を勧めています。数年前に大流行したことで関心が高くなっているロタウイルスワクチンですが、当院で出生した児の80%以上はロタウイルスワクチン接種を行っています。若手の医師、看護師が接種を熱心に勧めていることも接種率の高さに繋がっていると思います。

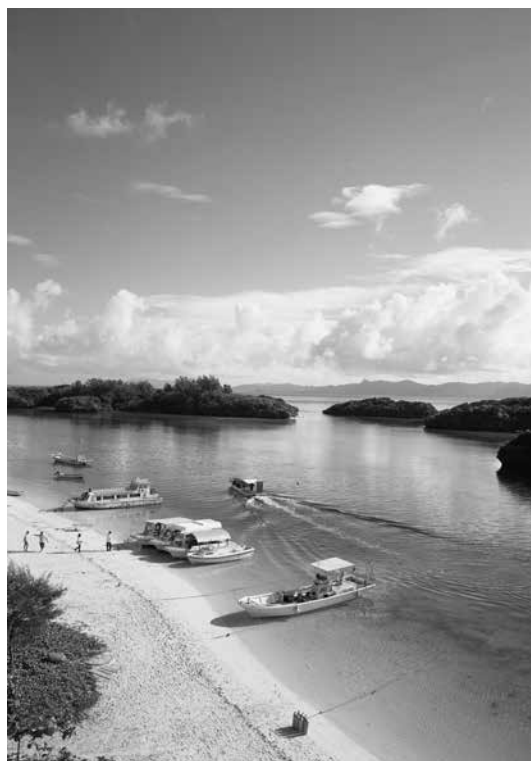
おわりに

私が八重山病院に勤務した時、私の子どもたちは小学校3年生と幼稚園生でしたが、すぐに島の生活に馴染みました。素晴らしい自然の中で、地域の方々に見守られながら育ち、島の高校を卒業しました。現在は内地の大学に通っていますが、学校が休みの時には時々島へ帰ってきます。石垣島がとても居心地よいようです。二人とも石垣島で育ったことが良かったとも言っています。私もこの島で仕事と子育て

てができたことを嬉しく思っています。

最後に、いつまでも八重山の子どもたちにとって
育ちやすい島であることを願っています。私も微力

ながら、これからも島のために関わっていきたいと
思います。



地域レポート

チームやんばるの母子保健活動

北部保健所 地域保健班長
保健師 玉城 浩江

私はやんばるで生まれ育ちました。保健師34年目になりますが、その大半をこの地で勤務しています。駐在保健師として14年間、5年間総務企画班の保健師として活動してきました。その経験が私自身の保健師活動のスタイルを作っているのかなと感じることがあります。

駐在保健師時代は地域のことをよく知っている市町村職員や社協職員、区長さん、民生委員、母子保健推進員、地域の有志等と知恵を出し合い、保健師として悩んだ時には保健所の大先輩達の知恵や技術を貸して頂きケース支援や保健事業の実践をしてきました。

総務企画班では地域保健法全面施行の節目で、保健所機能強化と駐在保健師引き上げ後の市町村支援が求められていました。保健所運営協議会や地区保健医療計画協議会等で、広域的に関係機関と調整を図り管内住民の安心、安全が守れる体制づくりに取り組みました。一方では保健師の人材確保、定着が厳しい小規模町村の支援をさせて頂きました。

その中で保健所が主体となって実施する広域的、専門的な立場での保健活動と市町村に支援及び連絡調整役として積極的に関与する活動をバランス良くすることの重要性を学びました。それが管内地域の公衆衛生の向上に繋がると感じています。それで私はどちらの仕事もわくわくして取り組み、それが私の保健師活動のスタイルになっているのかもしれない。

今回は私が自慢のやんばるの母子保健活動を紹介します。やんばるの自慢は支援者同志が顔の見える関係で、必要に応じ一緒に協働してケース支援や事業を進めていることです。また時間外の「飲みニケー



ション」も年に数回あり、職位や職種を問わず和気藹々とした時間が、多職種連携の潤滑油となっています。

さて、まずはチームやんばるの自慢の一つである、療育システムをご紹介します。

平成12年度から14年度までの3年間「障害児の総合的な保健福祉サービスの実態と今後のあり方に関するモデル事業」を実施し、その中で地域療育検討委員会等から「障害者・児が安心して暮らせる地域をめざして」という共通目的を達成するために5つの提言が出されました。

提言1の「やんばるのすべての地域で療育が継続できる体制を築こう」の目標を達成するための具体的な取り組みとして、「親子ふれあい事業」があります。本事業は平成9年度から実施され、離島3村（伊江村、伊平屋村、伊是名村）、名護療育医療センター、保健所の共同事業です。離島においても身近な場所で親子が相談できる個別相談会と、必要に応じ保健師や保育士等の支援者が、障害児への対応方法を学ぶ研修会を実施しています。

また、入院時から在宅支援に向け情報共有することを目的に「ひびきの会」を平成14年3月から現在まで第1火曜日午後1時～2時を定例とし継続実施しています。北部保健所の保健師が事務局となり、

県立北部病院小児科医師及び看護師長らスタッフと名護療育医療センタースタッフ（医師、看護師、コーディネーター）の三者の会議でしたが、現在では北部の療育・教育相談の主になる相談支援事業所「うむさばる」や市町村保健師も加わり、それぞれの機関の新たな取り組み等の情報提供もあり、内容は多岐に渡っています。会議終了後は必要な地域の支援者が病棟でケースや保護者の面談等もあり、スムーズな地域移行が進められています。

提言2「ライフステージごとに利用者のニーズを的確に把握し、対策を検討しよう」の目標を達成するための具体的な取り組みは北部圏域障害者自立支援連絡会議の療育・教育部会を中心になされています。管内市町村の委託相談事業所「うむさばる」を部会長に、市町村障害者担当や保健師、市町村教育委員会指導主事や特別支援教育のコーディネーター等も含め、圏域の課題を共有することを目的に年2回開催しています。発達障害の切れ目のない支援は国頭村をモデルに取り組み、他の市町村の障害者自立支援協議会のこども部会等へも活動が広がっています。保健所はモデル事業や経験が少ない村保健師の支援として会に参画しています。

また、平成24年度より「北部圏域障害者自立支援連絡会議（療育・教育部会）重度心身障害者支援体制整備ワーキング」において北部圏域の在宅長期療養者児（者）の支援体制について協議を行ってきましたが、県の組織改編を期に平成28年度より、重度心身障害児（者）支援体制整備については北部保健所にて行うこととなりました。保健所保健師は担当する小児慢性特定疾病のケース支援で見てきた医療的ケアの依存度が高い方のレスパイトや居宅介護、訪問看護の必要性について在住地市町村へ問題提起し、新たな福祉サービスの必要性を提案しています。

提言3「とぎれない支援ができるしくみをつくろう」の目標を達成するための取り組みの一つに「4歳児健康相談」があります。この事業は学齢期入りの移行期支援を強化する目的で、平成15年度より事業が開始されました。乳幼児から就学に向けて、就学に際して保護者の判断の助けとするため、教育

委員会が実施する就学時健康診断の1年前に医師、心理士、保健師等の専門職と相談を行います。おそらく県内ではやんばるのみが実施しており、3歳児健診以降就学時健診まで軽い発達遅れの問題や就学に向けて、親の不安相談の場として有効に活用されています。主な紹介者は保育士や市町村保健師です。

提言4「利用者のニーズに基づくケア計画を実現するための支援体制を地域で確立しよう」と提言5「障害者や家族が意見を発表し、仲間の活動を強化しよう」は、今回割愛します。

もう一つの自慢は、保健所と市町村連携が密なことです。市町村支援をする中で意識していることは、市町村の保健事業の実態を保健所がわかることです。実態がわかるには重点事業として取り上げている市町村の事業を実際に見てみることです。例えば乳幼児健診のフォローアップとハイリスク妊産婦の支援が平成28年度の母子保健の重点事業でした。保健所の母子保健担当保健師は若手が多く、市町村保健事業を経験していません。そこで市町村保健師に協力依頼し、乳幼児健診の事前準備、当日の運営、事後フォローを体験させて頂きます。そこで市町村の保健師と関係が良好になり、お互いが気軽に相談し合えるようになりました。また親子手帳交付台帳やハイリスク妊産婦支援台帳、乳幼児健診フォロー台帳等や訪問記録、フォローアップの基準等を重点支援地区とした市町村の保健師や母子保健担当と調整会議を重ねることで市町村の母子保健の実態がわかります。それに合わせた管内母子保健担当者会議や母子保健担当者研修会議の企画に繋げていきます。市町村の活動を共有することで、保健所の調整機能が発揮できると思います。

これからも市町村を始め、関係機関と一緒に汗を流す保健所でありたいと思います。



管内新任保健師歓迎会